



伊藤体育会会長の挨拶

attention

2024年度体育会優秀選手塾長招待会

12月12日(木)、三田キャンパス南校舎内 生協食堂および山食にて「慶應義塾体育会優秀選手塾長招待会」が開催されました。総勢約450名の部員が集い、応援指導部により大いに盛り上がりました。詳細は、2ページをご覧ください。



応援指導部の土橋代表(経4)の指揮で塾歌斉唱

早慶両校で創り上げて来た早慶合気道定期競技会

合気道三田会会長 金子 良平



昨年10月第33回 早慶合気道定期競技会が開催された。結果は、残念ながら早稲田の優賞であった。歴代の記録を辿ると、本塾13回優賞、早稲田19回、両校優賞1回となる。「早慶戦」と言わず「早慶定期競技会」と取って言い、「優勝」とも言わず「優賞」と言う。早慶定期競技会として33年、その

前身である早慶合同演武会から数えて40年、そこには、合気道という武道の本質と流派を超えた両校の思いがある。

合気道は、古流柔術の一つ、大東流柔術の流れを汲む武道である。昭和に入り、開祖 植芝盛平師が柳生流や起倒流柔術なども取り入れて、昭和19年に合気道と名付けた。慶應義塾の合気道部は、植芝門下で最高実力者といわれた藤平光一師の心身統一合気道を修業している。一方、早稲田大学体育局合気道部は、合気道界で唯一競技化を進めた富木謙治師の富木流合気道に取り組んでいる。この2つの流派は180度違うものである。

これだけ異なる流派が、定期的に競技会を開催するには、幾多の克服すべき課題があった。第一の点は、他流派との交流禁止であった。この点は、昭和47年に慶應合気道部が、体育会に昇格したことが、契機となった。慶應義塾を代表する立場として、早稲田を代表する体育局合気道部をその交流相手とするのは、当然であるとの結論に至った。第二の点は、試合・競技化の禁止であった。慶應は、武道としての合気道に取り組んでいるのだから、真の意味での

試合は、真剣勝負しかない。そこで、試合ではなく技を競う。演武と審査制乱取り稽古の二つのパートに分けて、両校卒業生から選抜された審査員がそれぞれを審査する形式とした。さらに勝負でないことを強調し早慶戦ではなく、早慶競技会として、勝ち負けではなく優劣とし、優れた方を優賞とした。第三の点は、慶應の心身統一合気道では行われていない乱取りを行うことであった。この点については、慶應が早稲田で行っている乱取りに近づいていくということではなく、両校で新たなものを創り上げることとした。乱取りの位置づけは、学生合気道の修業の一助であり、目的ではないということから審査制乱取り稽古とした。

学生合気道は、合気道の基本を重視する。すなわち、学生合気道においては、流派特有の部分ではなく双方に共通する基本となる武道性を追求していくという理念が、次第に早慶で形成されていった。

こうして、33回の早慶定期競技会が開催され今日に至る。今も決して完成形ではない。毎年、早慶卒業生による審査委員会が組成される。そこで、前年の振り返りを行い、より良いものにするために改善点を両校で徹底的に協議して互いに稽古を重ねる。早慶卒業生と現役部員が一体となった共同運営が行われている。早慶共に、福澤諭吉先生の言われた「半学半教」の精神で取り組んでいる。様々な葛藤の中で模索してきた早慶定期競技会、今後も試行錯誤は続く。この切磋琢磨のプロセスこそが、合気道の本質とは何かと問い続けることになる。今年も、また早慶卒業生による審査委員会が組成される。秋に開催される34回の早慶定期競技会が楽しみだ。